

国東半島の旅 2025

旅のチカラ研究所

2025 年 10 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

秋の国東半島を 2 泊 3 日で旅してきた。前半は友人との個人旅行で自由気ままに国東半島とその北にある姫島に渡り、島の旅を満喫した。後半は日本旅行作家協会のイベントに参加して国東半島の付け根にある宇佐市の歴史文化を学んできた。

第一章 国東半島と姫島

■国東（くにさき）半島を巡る

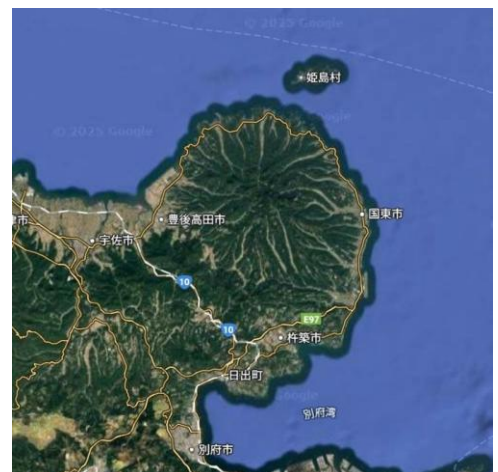
10 月中旬、まだまだ暑い日が続く中、私と友人は大分空港に降り立った、そしてレンタカーを借りて国東半島に向けて出発する。

その友人とは数年前のモロッコ旅行で知り合いになり、今では時々一緒に国内を旅する仲になっている。彼は私の旅友の中でも知的センスがあり、テレビの情報番組に出演していそうな人物なので、私は彼をコメンテータと呼んでいる。

さて私たちがこれから行こうとしている国東半島について、私はあまり知らない。知っているのは、大分県の北東部で摩崖仏が多いということくらいだ。さすがにコメンテータはもう少し知っていると思いきや、彼もまた私と同じくらいらしい。

レンタカー会社でもらった地図を見ると、国東半島の真ん中には山があって高くなっている。そこから海に向かって谷が放射状に伸びており、そのために半島は綺麗な円錐形をしている。

私たちはその円錐の中央にある両子山（ふたごさん）の「両子寺」を目指すことにした。



【国東半島】

両子山は標高 720m ということだが、私たちは海拔 0m から出発しており、それなりに坂を登らないといけない。山間の道を登っていくので景色は山と谷ばかりであり変り映えがしない。ところどころに〇〇寺や△△寺への案内看板が出ており、この半島にはかなり多くの寺があることを実感する。

そんな道を 2 台の自転車が一生懸命ペダルを踏んで登っている。追い抜いた後にバックミラーで顔を見ると、外国人のカップルだ。こんなところでも外国人が訪れていることに、私もコメントータも驚くばかりだ。

両子寺に到着する。古い寺だが、なかなか格式が高そうだ。本堂の前にある看板には 713 年に開かれた神仏習合の稀有な寺院で“六郷満山”の中心だと書かれている。

六郷満山とは一体何だろうか。コメントータに聞いても何も知らないと言っている。別の看板には以下のように書かれている。

六郷満山とは国東半島にある寺院群の総称で、六郷とは両子山を中心として下に放射状に広がる谷に開かれた 6 つの郷つまり集落のことで、満山はそこに築かれた寺院群を指す。

その経緯は古来より国東半島にあった山岳信仰が、奈良時代末期から寺の形態を取るようになり、近隣の宇佐神宮及びその寺である弥勒寺を中心とする八幡信仰、さらには天台系修験と融合した結果、神仏習合の独特な山岳仏教文化が形成された。

つまり古代山岳信仰、修験道、神仏習合、八幡信仰がこの国東半島に存在している。これは何だか凄いところに来たようだ。

両子寺には肩書がたくさんある。六郷満山総持院、九州三十六不動一番札所、九州西国第六番札所、国東霊場巡り第三十一番札所、百八観音第八十番札所、とにかく凄い寺だということは理解できる。

それも知らないで能天気やって来た私たちは、他の参拝者たちからも、神仏からも呆れられているに違いない。

それにしても参拝者には外国人が多い。彼らは当然このような歴史文化を知って来ているのだろう。

そして先ほど車で追い抜いた自転車の 2 人も、ここを目指して登って来ているのだろう。

境内で偶然出会った日本人参拝客は「護摩堂が有名ですよ」と言っていたが、残念ながら修復中で見ることができない。さらに「奥の院があるからそこも面白よ」と言っていたので、私たちは奥の院まで歩き始める。いや登り始める。すると途中に大きな石の鳥居がある。寺に鳥居とは、まさしく神仏習合だ。

奥の院は、建物の半分が岩山の中にあって、いかにも修験道の修行場所という雰囲気がしている。そしてここにも外国人が参拝にきている。



【奥の院に行く階段の下鳥居】



【岩山の中にある奥の院】

■ 姫島

国東半島の先に「姫島」という小さな島がある。最近の私は島巡りに精を出しているので、今回の旅の目的の一つをこの姫島にしていた。

国東半島の北端にある伊美港からフェリーに乗って姫島を目指す。フェリーは車も載せられるいわゆるカーフェリーで、結構大きい。どうやら国東半島と姫島とを車で行き来することが日常的らしい。

フェリーに乗ること 20 分、姫島に到着する。

姫島はこの島だけで姫島村という一つの村になっている。そしてフェリーは姫島村が運航させている。驚いたことに姫島港にはもう 1 隻同型のフェリーが係留してある。その船体には「第一姫島丸」と書かれている。



【姫島村のもう一隻のカーフェリー】

私は 100 島以上の日本の島々を訪れているが、民間ではなく自治体がフェリーを運航させている例はかなり珍しい。

宮城県の塩釜市の沖にある裏戸諸島は、塩釜市営の船が就航している。しかしこれは本土にある塩釜市が同じ塩釜市の裏戸諸島に通勤通学のための船を出しているの、いわば市内バスのようなものだ。もちろん人間しか載せられないからカーフェリーではない。

そんなことなので、コメンテータは「この島は相当金を持っているね」と言っている。

姫島村の人口は 2023 年現在 1642 人、村いや島のサイズは 2〜3 時間も歩けば一周できそうで大きくない。そのくらいの村でカーフェリー 2 隻も所有するのは、金がないと不可能だろう。

そしてこの島は 7 つの火山で出来ている。本稿の最後の旅の記録にその説明看板を掲載する。

■車海老尽くし

姫島村が裕福な理由は車海老だろう。島内を少し歩くと車海老の養殖場がたくさんある。

コメンテータは「そういえば銀座の高級料理屋で出てきた車海老は姫島産だったかな」と言っている。彼は高級料理店巡りを趣味にしているから確かな情報だろう。

実は今回姫島を訪れた最大の理由は、その車海老を食べるためで、今宵泊まる「安西旅館」では“車海老尽くし”を食べることになっている。

宿の夕食の食卓には車海老のしゃぶしゃぶ、車海老の天ぷら、その他に鯛やイカの刺身など盛りだくさんの海の幸が並んでいる。



【最初にてできた料理】

これだけの料理でも十分な量だが、車海老 2 尾を氷水に浸けたもの 2 皿が出てきた。

持ってきたのは旅館の女将で、彼女は「これが車海老の踊り食いです。今は仮死状態ですが、まだ生きていますから、気を付けて食べて下さい」と言っている。

私もコメンテータも踊り食いの経験がないので、「どうやって食べたらいいの？」と聞く。

女将は「殻を剥いて食べるのですが・・・、良かったら私が剥きましょうか？」と言ってくれるので、私たちは「お願いします」と元気よくハモリながら言う。

女将が 1 尾を手に取り、殻を剥こうとした時、その 1 尾が元気に飛び跳ねて女将の手から飛び出した。そして食卓の上で飛び跳ねている。

女将は「活きが良いでしょう、仮死状態だったけれど目が覚めたようね」と言っている。どうやら女将の手のぬくもりで目が覚めたようだ。女将がその車海老を再び氷水に漬けると、10 秒くらいしておとなしくなる。そしてまた剥き始める。



【踊り食いの車海老 1人分の2尾】

私とコメンテータは目を丸くして、その様子を見ているだけだ。

そしていよいよ女将が殻を剥いてくれた、まだ生きている元気な車海老を踊り食いすることになる。

美味いに決まっていると思いながら、口に運ぶ。やっぱり美味い。そして口の中でも少し動いている。

踊り食いでもさすがに車海老の頭は食べないので、女将が頭だけ持ち帰り、素揚げにしてくれた。そしてこれもまた美味い。

その後も車海老の焼き物、車海老のフライが出てくる。そしてこの海老フライが絶品だ。

コメンテータは「こんなに美味しい海老フライは、生まれて初めて食べる」と言っている。多少の誇張はあるものの食通の彼の言うことなので嘘ではないだろう。

私も食べるが、確かに美味い。新鮮で肉厚の車海老を実に上手に揚げている。

そしてコメンテータは女将に「女将さんは銀座のどこの店でママをしていたの？」と訊いている。女将は「そんなあ、おじょうずね」と半分喜びながら言っている。



【焼き車海老】



【車海老のフライ】

その後も鯛のアラの煮付けに続いて、車海老の炊き込みご飯が出てきた。車海老の殻を剥いて炊き込んだもので、さすがにこれはこの島でないと食べることができないだろう。

そして吸い物にも車海老が入っていた。



【鯛のアラの煮付け】



【車海老の炊き込みご飯】

■安西旅館

車海老尽くしの夕食が終わり、片付けに来た年配の仲居さんとコメンテータが世間話をしている。こういうのはコメンテータが得意とするところで、彼と仲居さんとの会話を横で聞きながら私は残りのビールを飲みながら、デザートを食べる。

すると、どういう流れでそうなったのか分からないが、仲居さんが「一曲歌わせてもらいます」と言って姫島の民謡を披露してくれる。澄んだ声でなかなかの歌唱力で、拍車喝采になる。

コメンテータは「仲居さん、何歳までプロの歌手をしていたのですか？」と言っている。彼女もまた「おじょうずね」と笑いながら答えている。

部屋に戻り、コメンテータと徒然なるままに話をする。彼はこの島もこの宿も大そう気に入ったようで「また来たい」と言っている。その理由は旅館や島の人々の“温かさ”にあるらしい。

そういえば宿に着いた時のことだ。

私が女将に「島内でどこか簡単に行ける名所がありますか？」と訊ねると、女将は「観音崎が近くていいですよ」と教えてくれる。

私は「歩いて行けますか？」と聞くと、女将は「歩いても行けますが、自転車で10分くらいですよ」と言っている。

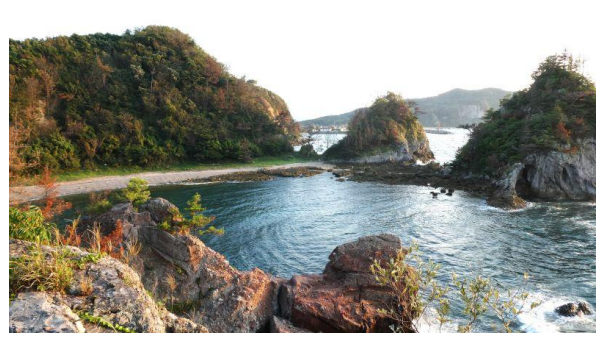
私は「レンタサイクルありますか？」とさらに聞くと、女将は「うちの自転車を使って下さい」ということになって、旅館の自転車を無料で2台借りて観音崎に向かった。

観音崎に着くまでの街の様子は、田舎の漁村の雰囲気、何となくほのぼのとしている。決して新しくないが、簡素で綺麗でゴミ一つ落ちていない。時々すれ違う島の人々は「こんにちわ」と挨拶をしてくれるのも気持ちが良い。

観音崎は小高い岬で、「千人堂」という堂があつて、「観音崎火口跡」という噴火口が小さな湾を作っている。そこに行く道や階段も整備されて綺麗になっている。街の中はもちろん、ここも島民が掃除しているのに違いないと、私とコメンテータは話していた。



【千人堂】



【観音崎火口跡】

翌朝、私たちが泊まっている部屋の窓から何気なく外を眺めると、旅館の前の道や近隣の家々が見える。極めて当たり前の景色なのに何故かホッとしてしまう。それは古いながらも小綺麗な家並みで掃除が行き届いているせいかもしれない。

朝食もまた豪華で、もちろん車海老の味噌汁が付いた。



【部屋から撮った安西旅館の玄関付近】



【朝食】

第二章 宇佐市

■日本旅行作家協会の特別例会

今年の初め、私は縁あって日本旅行作家協会の会員になった。

その協会の HP には以下のように書かれている。

当協会は旅行に関する作家、編集者、写真家、放送関係者、翻訳家、研究者並びに広報担当者等の専門家団体で、会員相互の親睦と協調を図るとともに、中立的な立場で、その品位と地位の向上に努め、旅行業界と一般旅行者に旅行地の正確な情報資料を提供し、さらに旅行の自由擁護、文化財、自然美保護のために力を尽くし、もって国際親善に寄与することを目的としている。

これは、私の旅のチカラ研究所の設立主旨と重なる部分が多い。

今回、その特別例会と呼ばれる旅行イベントが大分県宇佐市で行われることになり、それに参加するのが、実は今回の私の旅の主目的になる。そして会員 1 名についてゲスト 1 名も同伴可能なのでコメンテータを誘った。

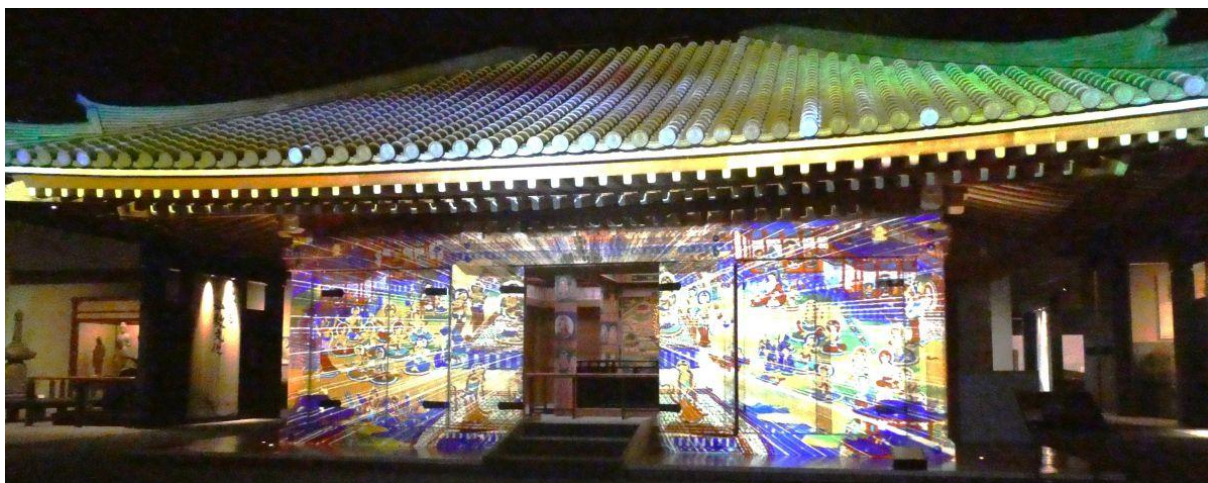
今年の特別例会は宇佐市の商工会議所が対応してくれるので、普段観ることのできない場所を地元の専門家たちがガイドをしてくれる。

大分空港に集合した参加者 18 人は貸し切りバスに乗り込み、宇佐市に向かう。車内では商工会議所の人がマイクを握り案内役を務めてくれる。地元のことをユーモア交えて話してくれる。

■大分県立歴史博物館

最初に大分県立歴史博物館を訪れる。博物館は 6 基の前方後円墳がある「宇佐風土記の丘」にあって、大分の歴史と文化を展示している。

館内には平安時代に創建された黄金に輝く阿弥陀如来像が安置してある国宝の「富貴寺大堂」を再現している。その富貴寺大堂の壁にはプロジェクションマッピングを使って当時の人や景色を見せてくれる仕掛けになっており、その見事な演出に感心している参加者も多い。さらに歴史博物館専属の専門家の説明がとても分かりやすい。



【再現された富貴寺大堂の壁のプロジェクションマッピング】

■宇佐神宮

歴史博物館でこの地域の歴史文化を勉強して、その中心的存在「宇佐神宮」を訪れる。私は初めて訪れるが、その大きさは私の想像を超えており、ただただ驚くばかりだ。

宇佐神宮は八幡信仰の総本山だという。八幡信仰とは、応神天皇を八幡神として祀るとともに仏教文化と日本固有の神道が習合し、武運の神として特に武士たちから信仰されてきた。それゆえ鎌倉幕府を開いた源頼朝は鶴岡八幡宮を建立したという。

これも専門家が教えてくれたことで、何も調べずにやって来た私にとっては実にありがたい。



【宇佐神宮の境内】

私たちが参拝していると祭囃子が聞こえてくる。そして神輿を担いだ 100 人以上の一团が私たちの目の前を通り過ぎていく。私たちはその神輿の後に続いて、上宮本殿まで階段を登って行く。何も持たない私たちでもきつい階段なのに、大きな神輿を担いでいる人たちはかなり辛そうだ。それでも皆笑顔なのは宇佐神宮の神通力なのだろう。



【神輿を担いで上宮本殿まで階段を登る行列】

上宮本殿は赤い壁あるいは柵のような建築物で囲われている。この中には一之御殿、二之御殿、三之御殿という小さな建物が並んで建っているという。この3つ建物が宇佐神宮の本殿で国宝になっている。

その上宮本殿内に神輿は入っていくが、神事なので私たちは入ることができない。さすがに商工会議所の権威もここまでは効かないようだ。

それでも本殿を参拝する賽銭箱のところから中の様子は見ることができる。残念ながら撮影禁止となっている。

中を覗き込むと国宝の御殿群が鎮座している。

その様子を見て、先ほど見てきた大分県立歴史博物館で展示してあった模型を思い出した。



【歴史博物館の一之御殿、二之御殿、三之御殿の模型】

上宮本殿の前で休憩をとっていると、神社の神官たち数人が本殿から出てきた。ここで私が偶然にシャッターを切った写真が面白い。

サ・ビートルズのアルバム「アビーロード」のジャケットを思い出すようなシーンで、我ながら感動してしまった。



【上宮本殿の前を歩く神官たち】

■石橋

翌日は宇佐市内の名所を見学する。

院内（いんない）地区には石橋が多く残っており、その数は75基もあるという。それら石橋の中でも特に有名な“石橋の貴婦人”と呼ばれる「鳥居橋」にやって来た。ここでも地元の研究者が石橋について細かなことを説明してくれる。

この地域に石橋が多い理由は深い溪谷を川が流れており、流れが急なため頑丈で流されない石橋を必要とした。その材質となる石が豊富に採れて、優れた石工も多かったからだという。

この橋が石橋の貴婦人と呼ばれているのは、橋脚が細く長いからだと言っている。



【鳥居橋】

「道の駅いんない」には大きな石橋のオブジェがある。全国には道の駅が山ほどあるが、私はこのようなオブジェは見たことがない。

そのすぐ近くにある2連アーチの「荒瀬橋」を見学する。この橋は橋高18mで、この地域で最も高い。つまりそれほど谷が深い。

川が深いから水があっても下流地域の水田に水が配れない。そのために谷の中腹に水を流すトンネルが掘られている。



【道の駅いんないの大きな石橋のオブジェ】

■ 鰻絵（こてえ）

宇佐市内の特に安心院（あずむ）地区では、民家の壁や戸袋に鰻絵（こてえ）と呼ばれる絵が描かれている。それは漆喰の壁面に鰻（こて）を使って色彩豊かな絵を描いたもので、明治初期から盛んに描かれるようになり、市内には約 90 ヶ所もある。

同行の専門家は「庶民の祈りと左官の心意気だ」と言っている。



【鰻絵】

■ 東・西本願寺

四日市地区には「西本願寺四日市別院」と「東願寺四日市別院」が隣接して建っている。両方とも尊厳ある大きな建物で、これらが並び建っているのが珍しいと案内人は言っている。

本願寺が東と西に分裂した原因は織田信長まで遡る。信長は本願寺門徒の一向一揆と戦い手を焼いていたので和議を申し入れた。本願寺側はそれを受け入れようとする勢力と徹底抗戦する勢力で内部対立した。そして豊臣秀吉の治世になり、秀吉から寄進を受けたのが西本願寺で、その後徳川の時代に家康から寄進を受けたのが東本願寺になる。

信長・秀吉・家康という日本を代表する戦国武将によって本願寺は東西に分裂した。

現在とはともかく、昔は反目していたはずなのにこのように大きな建物が隣接して建立されたのは極めて珍しいらしい。対立していたので競い合って大きな寺院にしたのかも知れない。

やはり人間はライバルがいると燃えるものだ。



【右が西本願寺四日市別院 左奥が東本願寺四日市別院】

東本願寺四日市別院の本堂は、幕末に焼失して立て替える予定だった。そのため現在の本堂は仮の本堂になっているという。

その東本願寺の本堂に入ることができた。中に入ると金箔の装飾が見事で、これを壊して立て替えるのはあまりにもったいない。



【東本願寺四日市別院の本堂内部】

■掩体壕（えんたいごう）

第二次世界大戦前から宇佐には海軍航空隊があった。それは海軍のパイロットを養成するためのものだったが、戦争末期には特攻隊が編成され多くの若者が出撃していった。それゆえこの周辺は米軍による空襲を何度も受けた。そのため飛行機を守る防御施設が造られた。

その防御施設が「掩体壕（えんたいごう）」と呼ばれている。早い話が飛行機の防空壕で、平らな場所に飛行機一機を隠すように石やセメントで覆われている。それらがいくつも現存しており、実に不思議な景色を作り出している。

近くには長い一直線の道路があり、滑走路の跡だという。もちろん現在も幹線道路として使われている。



【掩体壕】

宇佐の歴史は、神代の昔から第二次世界大戦まで多岐にわたっている。そしてそれらのどれもが面白い。しかしながら私が感じたことは、少し言い過ぎかもしれないが、宇佐の歴史はそこで止まっているという印象だ。

これだけ良いものがあるのに、あまりにもったいない。その止まっている歴史を前に進めるために、私たちに何かできることがあるかもしれない。

■意見交換会

特別例会の最後は、宇佐市商工会議所で意見交換会になる。私は通りいっぺんの御礼の儀式に終わるのかと思っていたが、ここでも私の予想が外れた。そしてそれは良い方向に外れた。

交換会は、止まってしまった宇佐を前に進めるべく宇佐復活のためにどうしたら人を呼べるようになるのかということの旅の専門家がアドバイスする場になった。

会員のお歴々たちが何点かアドバイスを伝える。その内容は的確で、実に的を射ている。商工会議所の人たちは熱心にメモを取り始める。

アドバイスは具体的でかなり突っ込んだものだったが、ここで詳細まで書く訳にもいかないので、概ね以下のような感じだった。

- ・役所も観光協会もホームページが貧弱で若者に直ぐに伝わり難い。そのためには動画を多用すべきだが現在は高価で、対応策としては生成 AI の活用をすると安価で早くできる。
- ・大分空港には韓国、台湾から直行便が飛んでいる。その 2 国のインフルエンサーに SNS を通じて宇佐の魅力を発信してもらう。
- ・宇佐は宿泊施設が少ない。そこで別府湾に寄港する大型クルーズ船のお客をターゲットに日帰りツアーを用意する。その際に大型バスに対応する駐車場などを整備する必要がある。
- ・宇佐は唐揚げ発祥の地である。唐揚げで宇佐を再認識させるように仕立てる。そのためには宇佐は USA と書くから、これを利用してキャッチコピーを考えると面白い。そのキャッチコピーと唐揚げについて極めて具体的な提案があった。

これらを聞いて私もコメンテータも感心した。何よりも 2 つの組織の本気度を感じた。

■「期待と落胆」と「偶然と感動」

最近の私は事前にあまり調べない旅に出ることが多い。今回もそのようにしていた。

その理由は、素晴らしい写真や映像を見て期待をして行くと、それを裏切る結果になることが多々あるからで、私はそれを「期待と落胆」と呼んでいる。

逆に現地に行って、予想や期待を超えた時に感動が生まれる。予期せぬこと、つまり偶然遭遇した感動ほど増幅される。私はそれを「偶然と感動」と呼んでいる。

旅は「期待と落胆」と「偶然と感動」が表裏一体になって進行していく。

今回巡った地域は、「偶然と感動」の連続だった。この地域に足を運ぶ事をお勧めしたい。

■旅の記録

実施は2025年10月12日（日）～10月14日（火）の2泊3日、その行程を示す。

- ・1日目 朝自宅を出て10時00分羽田空港発のフライトで11時40分大分空港着、レンタカーを借りて国東半島の探訪、レストラン「くにさき牧場」で昼食、「瑠璃光寺」と「両子寺」を参拝、伊美港からフェリーで姫島へ渡り、「安西旅館」にチェックイン、自転車を借りて「観音崎」へ行き「千人堂」、「観音崎火口跡」を見物、宿にもどり夕食
- ・2日目 朝食後、宿を出て9時15分のフェリーで伊美港に戻り、「長崎鼻」見物、空港に戻りレンタカーを返却、12時に日本旅行作家協会の特別例会に参加、スで移動、食事処「丸萬」で昼食、「大分県立博物館」を見学、「宇佐神宮」参拝、和洋会席「翔山」で夕食、「ホテルAZ 安心院（あじむ）」チェックイン
- ・3日目 10時に宿を出て、宇佐市内の石橋「鳥居橋」「荒瀬橋」、「鰻絵（こてえ）群」見学、レストラン「朝霧の庄」で昼食、「東・西本願寺四日市別院」参拝、三和酒類の施設「辛島 虚空乃蔵」に立ち寄り、掩体壕（えんたいごう）」を見物、17時15分空港に戻り解散、19時10分大分発のフライトで帰宅

費用の総額は約6万8千円、詳細を記す。

- ・特別例会参加費 18000 円（バス費用、入館料、食事、宿泊費全て込み）
- ・宿泊費 21060 円（安西旅館 飲み物代含む）
- ・飛行機代 21800 円（羽田～大分の往復 JAL タイムセール利用）
- ・レンタカー 3650 円（レンタカー6380 円とガソリン代を2で割った1人分）
- ・フェリー 1160 円（伊美～姫島 往復）
- ・昼食代他 2300 円（くにさき牧場のランチ 2000 円 両子寺の拝観料 300 円）



【姫島の火山についての説明】